

産科・婦人科

1. 研修責任者

井笠 一彦

研修医へのメッセージ

産科では生命の誕生という崇高なイベントに立ち会う責任の重さと感動を経験してもらい、婦人科では多くの手術手技の習得やがん患者の画像診断・薬物療法など、バリエーションに富んだ内容の研修をおこなってもらいます。内科系・外科系の両者の内容を含む研修であり、スタッフの一員として実践的な研修を通じて学んでいただくことを期待しています。

2. 一般目標

分娩および産婦人科疾患の診断治療に対する基礎知識と手技の習得を目的とする。

外来、病棟、手術室に勤務し、基礎的診療法、診断法、治療法について指導医のもと研修を行う。産婦人科特有の患者およびコメディカルスタッフとのコミュニケーションに配慮し、その立場を理解し信頼関係を形成する。

3. 行動目標

A. 経験すべき診療法・検査・手技

1. 基本的な身体診察法

内診、腔鏡診による女性の内・外性器の所見

妊娠、および加齢（新生児期から老年期）による変化

正常および異常新生児の診察

2. 基本的な臨床検査

腔分泌物の肉眼的および顕微鏡的所見

子宮頸部および子宮内膜の細胞診ならびに組織診

周産期および婦人科疾患の超音波検査

子宮卵管造影、腎孟造影、婦人科良性疾患および悪性疾患のMRI画像

各腫瘍マーカーの特徴、婦人科内分泌学的検査

3. 基本的手技

正常および異常分娩の取り扱い（分娩介助、会陰切開および縫合、吸引分娩など）

良性婦人科手術および帝王切開の介助、新生児のプライマリ・ケア

4. 基本的治療法

正常および異常妊娠、分娩、産褥の管理

産科および婦人科手術時の術前・術後管理

急性および慢性期の婦人科疾患の治療法

婦人科悪性腫瘍の薬物療法

5. 医療記録

産婦人科カルテの記載法

B. 経験すべき症候、経験すべき疾病・病態

① 頻度の高い症状

性器出血、月経異常、帶下・外陰搔痒、腹痛、腰痛、腹部膨満感、排尿障害

② 緊急を要する症状・病態

産科的疾患：各種流産、異所性妊娠、常位胎盤早期剥離、前置胎盤の外出血、胎児仮死、弛緩出血、切迫早産

婦人科的疾患：急性腹症を伴う婦人科感染症、卵巣腫瘍の茎捻転、卵巣出血、子宮出血

③ 経験が求められる疾患・病態

産科的疾患：妊娠・出産、妊娠悪阻、子宮頸管無力症、周産期感染症、妊娠中毒症、偶発合併症妊娠、前期破水、多胎妊娠、前置胎盤、微弱陣痛、子宮復古不全、産褥熱

婦人科疾患：婦人科感染症、不妊症、更年期および老年期の各種疾患、子宮筋腫、子宮内膜症、子宮頸癌および体癌、良性および悪性卵巣腫瘍、終末期の症候

※下線部は医師臨床研修指導ガイドライン 2023 年度版に記載の 29 症候、26 疾病・病態に記載のあるもの。

C. 特定の医療現場の経験

婦人科診察の特殊性

産婦人科救急の経験および高度医療機関への搬送時の対応

婦人科悪性腫瘍などの終末期の管理

4. 方略

(1) 指導体制

指導医 1 名、上級医 1 名からなるチームに 1 名の研修医を配属する。配属された研修医は担当医となり、産婦人科疾患の診断、検査、治療についての全般的な指導を受ける。研修医は 5 名程度の入院患者を受け持つ。

(2) 診療録記載、退院サマリ作成

研修医は患者診察後、速やかに診療録を作成する。指導医・上級医はその内容を確認し、指導する。その際、問診・診察・検査の解釈についても合わせて指導する。身体診察時は指導医・上級医が立ち会う。

(3) プレゼンテーション実施

研修医は教授回診やカンファレンスなどでのプレゼンテーションを準備、実施する。指導医・上級医は事前に指導する。

(4) 各種オーダー実施

指導医・上級医は研修医の習得状況を確認し、指示、処方、注射、検査、病理、画像、食事、輸血などのオーダーを経験させる。その際、基本的治療法について理解できているか確認し指導する。

(5) 血液検査結果説明・病状説明実施

研修医は日々の血液検査結果を自身で解釈し、指導医・上級医とのディスカッションの上、患者に説明する。また指導医・上級医は研修医の習得状況を確認し、患者への病状説明を経験させ、その内容についてフィードバックする。

(6) 各種手技実施

指導医・上級医は研修医の習得状況を確認し、各種手技を経験させる。

内診、腔鏡診、超音波検査、分娩介助、会陰切開および縫合、手術の助手などを指導医・上級医の監視下で実施する。

5. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金
午前	手術	外来予診 病棟	外来予診 病棟 月1回は手術	手術	外来予診 病棟
午後	手術	外来検査 病棟	産科婦人科回診 術前術後カンファレンス 抄読会	手術 周産期カンファレンス	外来検査 病棟

6. 評価方法

PG-EPOC を用い評価する。評価者は診療科長とする。

1) 知識

教授回診やカンファレンスにおいて産婦人科疾患について質問を行い、知識の習得状況を評価する。

2) 技能

指導医・上級医の立ち会いのもとで各種手技を実施し、習熟度を考慮した上で研修医単独で実施する機会を与え、技能の習得状況を評価する。

3) 態度

指導医、上級医、看護師、助産師、その他メディカルスタッフからも意見を聴取し、医師として相応しい態度の習得状況を評価する。

診療録、病歴要約の適切な記載ができているかも評価する。